



予知能力



川崎ゆきお

日常の些細事を気にするのは、他に何もなければだろう。他のことで忙しいと、どうでもいいことになり、神経も回らないだろう。ただ、仕事上での些細事はどうなのか、これは微妙だ。早くそれに気付いたため、助かることもある。役に立ったり、ヒントになったりもする。それも含めて仕事なのかもしれない。ただ、そういう神経の細かそうな人が横にいるとやりにくいだろう。

「山田君はセンサーのようなものですねえ。真っ先に異変を感じる。それは注意深く神経を張り巡らせているためですか」

「そうではありません。自然に気付くのです」

「ほう、私は言われるまで気付きませんでした」

「周囲をよく見ているからですよ」

「私も見えています」

「そのとき引っかかるのです。いつもと少しだけ動きは違う。形が違う、色が違う」

「それはごくわずかな変化ですか」

「そうです。気付かないほどの」

「じゃ、気付かないでしょ。普通の人には」

「そうですか、僕は意識していなくても気付きます。見えている物だけじゃなく、音や空気なども」

「五感で関知しているのですね。センサー山田とはよく言ったものです。私も、そんな部下がいて心強い」

「それ以前に」

「何かな」

「観察の努力も必要です。しかし、これは余所見なんです。だから、いい部下じゃないです」

「しかし、この前の事故を未然に防いだのは、君のおかげだよ。おかげで私も誉められた」

「あれは余所見していたためです。風もないのに、ひらひらと糸くずが揺れてました」

「漏れていたんだ。君はそれに気付いた。あのガスは無臭だからねえ」

「でも仕事中、余所見していたようなものです」

「いやいや、余所見じゃなく、気になったから、見たのでしょ」

「はい」

「じゃ、いいじゃないか。センサー山田として、これからも活躍してくれ」

「仕事はいいのですが、家庭が」

「奥さん、何処かへ行ったんだってねえ。子供を連れて」

「はい、二回目です」

「センサーが効きすぎたのかねえ」

「だと思います。それで悟りました」

「悟ったと」

「はい」

「どういう風に」

「気付いても知らん顔することに」

「簡単な悟りだねえ」

「感知できすぎるとだめです。知っても知らない振りをする」

「なるほど。私は鈍いほうでねえ。逆にそれで平和なのかもしれない」

「台風が来ていますねえ」

「ああ、まだ先だけど」

「あれはそれです。こちらには来ません」

「どうして分かるんだ」

「表の草むらにいる藪蚊の動きで分かります」

「嘘だろ」

「ああ、これは、よけいなことです。仕事とは関係ありません」

「君」

「はい」

「そのセンサー、別の物じゃないのかい」

「はあ」

「そこまで見えたり、分かるってのは、少し違うよ」

「何が違います」

「いや、普通じゃ……」

「あ、今のは冗談です」

「本当かなあ」

「はい」

「そんなに予知ができるのなら、職業を変えた方がいいよ。君」

「あ、はい」

了